第34回琉球新報児童文学賞

短編児童小説部門

天使の降る町

比嘉 稔

天魔飛行場の上空に、金色に光る雲がかかっていた。天使雲だ。

私は大急ぎで朝ご飯を食べ終えると、ランドセルをしょって家を出た。

「行ってきます」

「また遅刻しちゃだめよ」

お母さんの声がうしろから追ってくる。たしかに、天使のせいで最近遅刻ばかりしている。私だけじゃないけど。

「リコ、急ごう」

同じクラスのカヨが走ってきた。

天魔飛行場はアメリカ軍の基地だ。だからフェンスで仕切られている。その国道ぞいにあるフェンスには、今日もおおぜいの人が集まっていた。

「あっ、降ってきた」

天使雲から、何千もの天使が降ってくる。

肌の色が真っ白な赤ん坊の背中に、真っ白な羽がついている。赤ん坊の髪はキラキラと光る金色。ほっぺたはつやつやしているし、手も足もぷにぷにとやわらかそう。そのかわいらしい赤ん坊がニコニコとほほえみ、小さな羽をゆっくり羽ばたかせながら空から降りてくる。

誰がどう見ても、あれは天使としか言いようがない。そう、マンガに出てくるようなエンジェル。

天使は天魔飛行場の滑走路近くにぷかぷかと浮いている。浮いているだけで何もしない。でも幸せそうに笑顔を浮かべている。

「かわいいー」

おとなも子どももみんな同じようにさけぶ。

毎日、いつまで見ていても、あきない。

天使を見ていると幸せな気持ちになる。もっと近くで見られたら、抱きしめることができたら、みんなそう思っているだろうけど、天使は天魔飛行場の外には降りてこない。

軍の兵士たちは、ときどき地上近くに来た天使を抱きとめて喜んでいる。天使は兵士に抱かれても何の抵抗もしない。兵士がほっぺたをつんつんつついたりしている。やっぱりやわらかいんだ。

兵士は天使に近づくなと命令されているらしいのに。いかつい顔がにやけていて、ほんとにうらやましい。みんなが動画を撮ってるから、きっとばれて叱られるに違いない。

天使が降ってくるようになったのは、一ヶ月ほど前のこと。その日は大騒ぎで車も道で止まって大渋滞。私たちもずっとフェンスにはりついて、給食の時間にようやく登校したほど。

天使たちは夜遅くまで飛んでいるが、いつの間にか消える。いろんな人たちが調べているけど、天使が何者でどこから来てどこに消えるのか、まったくわからないと言う。

現れる前には天使雲が浮かぶのはわかっているけど、その雲がどこから来るのかわかっていない。

基地の医務室で、天使のレントゲンを撮ろうとしたこともあったらしいけど、いつの間にか消えていたと言う。手術台にしばりつけて解剖しようとした研究者もいるらしい。ほんとにバチ当たりだ。

日本全国、いや外国からもマスコミが集まって毎日のようにテレビで放送している。

ネットでも多くの人が写真や動画を投稿している。

観光客も日本全国、そして海外からも集まってきて、天魔飛行場のフェンス前は一日中人がうまっている。

天魔飛行場の近くに住んでいる私たちはちょっとだけラッキー。朝早く行って場所を取ることが出来るから。でも最近は夜中から場所を取ってる人もいるみたい。

天使が降ってくると、ヘリも飛行機も飛ばない。天使にぶつかると危ないからだって。天使じゃなくて、ヘリや飛行機が。おかげで、この一ヶ月間ずっと静かな日が続いている。これまでのあのうるさい日がうそみたいだ。

私とカヨは今日も遅刻した。私たちだけでなく、クラスの半分以上が遅刻だ。

「いくら天使がかわいくても、毎日毎日遅刻してどうするんです」

担任のキョウコ先生が目をつりあげて怒る。でも、私は見ていた。キョウコ先生もフェンス近くで天使を見ていたのを。でもま、先生たちは天使を見ていてもちゃんと時間通りに学校に来るんだから、えらいなあ。

ここんところ、休み時間は天使の話ばっかり。女子は、自分たちのスマホでとった写真や動画をみんなで見せ合ってキャッキャさわいでいる。男子も興味はあるみたいだけど、ちょっと恥ずかしがってあまり話には加わらない。

学校が終わってから、またカヨと天魔飛行場のフェンスまで行ってみたが、もう観光客がいっぱいで場所がなかった。近くのマンションやビルの屋上にも人がいっぱいだった。

私たちは朝早く行けば見られるから、あきらめて家に帰ることにした。

「あい、リコちゃん、今帰りかい」

家の近くで、お隣のトミおばぁが笑顔で声をかけてきた。おばぁは九十歳近いというけど、耳も目も頭もたっしゃだ。いつもニコニコしている。

そんなトミおばぁが、一ヶ月前からなんだか元気がないように見える。いつもと同じように笑っていても、ちょっと違う。ちょうど天使が降るようになった時からだ。

「おばぁさあ、最近なんか困ったことでもあるの」

私はそう聞いた。

目上の人にタメ口はダメ、とお母さんに怒られたけど、トミおばぁはそれでいいよと言ってくれる。友だちみたいで嬉しいと。私も友だちみたいな気がするから、怒られてもタメ口になってしまう。

「だいじょうぶ、なんでもないさぁ」

おばぁはそう言いながらため息をつく。

なんかあるのはまちがいないけど、おばぁが言いたくないんだったら、それ以上は聞かない。私だって、聞かれたくないことはあるし。

「おばぁも天使を見に行ったら。あれ見たらきっと元気が出るよ」

そう言っても、おばぁは首を変だ。二人がおとなしくなったのも天使が降るようになってからだ。

放課後、カヨと一緒に市立図書館に行くとき、公園の近く、うがんじゅのある森の方にアキオとタケシが入っていくのが見えた。

うがんじゅは神さまがいるところと言う。お年寄りたちが時々おがんでいるのを見るけど、ちょっと薄気味悪いふんいきがあって、私たちはあまり近寄らない。

「あいつら、何してるんだろ」

私とカヨは後をつけてみた。

うがんじゅは、ちょっと坂を登ったところにある。森の中のちょっと開けた場所にコンクリートでできた小さなほこらがあって、そのうしろは山の斜面だ。昔はそこに洞くつがあったらしい。

その斜面に大きながじゅまるが一本はえていたが、がじゅまるの下、うがんじゅのうしろに大きな穴が開いている。

トミおばぁが、その穴をのぞいていた。

はなれた木のかげから、アキオとタケシがそれを見ていた。

「あんたたち、何してるの」

カヨが声かけると、二人がびくっとしてふりかえった。トミおばぁもこちらを見た。

問いつめると、アキオとタケシはうつむきながら、ぼそぼそとしゃべる。

「がじゅまるに登ろうとしただけなんだ。セミをとろうとしてさ」

「で、地面がくずれて穴があいたんだね」

トミおばぁがにらむと、アキオとタケシはその時のことを思ふる。

「あれは天使じゃないよ」

「えっ」

私はおどろいておばぁの顔を見た。天使じゃなかったら何なのだろう、そう聞き返そうとしたら、おばぁは何かぶつぶつ言いながら行ってしまった。

おばぁは天使の正体を知っているのだろうか。

元気がないといえば、同じクラスのアキオとタケシもそうだ。いつだって授業中でもさわいだりするくせに、ここ最近はおとなしい。おとなしいというより暗い。二人でこそこそ何か話していることがある。

「あんたたち、どうかしたの」

カヨが聞いたら、びくっとからだをふるわせた。そして、二人とも何も言わずに教室を出て行った。

「あいつら、なんか変だよね」

カヨの声に私はうなずく。

私はそう言いながらため息をつく。

なんかあるのはまちがいないけど、おばぁが言いたくないんだったら、それ以上は聞かない。私だって、聞かれたくないことはあるし。

「おばぁも天使を見に行ったら。あれ見たらきっと元気が出るよ」

そう言っても、おばぁは首をふった。

「あれは天使じゃないさ。あれはマジムンだよ」

「マジムン？」

「魔物さ。あれはね、八十年ぐらい前の戦争の時にもいっぱい飛んでたんだよ。あの時は真っ白じゃなくて、雨雲のように濃いネズミ色だったけどね。爆弾といっしょに、あれらもいっしょに飛んでたんだよ」

あれが昔の戦争の時にも飛んでいたの？

「人間を殺してたの？」

「いや、あれらは、ただ飛んでただけ。たぶん戦争で死んだ人間のマブイを食べてたんだろうね」

「マブイって、魂だっけ」

「そう。戦争が終わってから、私の母親やその仲間のカミンチュたちが集まって、あれをこのうがんじゅのうしろの洞くつに封じ込めたんだ」

「カミンチュって何？」

「神さまにお仕えする人のことさ。マジムンを封じたりもする」

「でも、あの天使たちは、何も悪いことはしなかったんでしょ」

「人のマブイを食べるんだから、悪いことさ。マジムンは表に出しちゃだめ」

おばぁはそう言いながら、穴をみつめた。

「八十年近くもたったから、カミンチュたちの霊力も弱ったのかね。子どもが乗ったぐらいであれらが出てしまうなんて」

「でも、おばぁ、戦争の時にはネズミ色だったんでしょ。今は真っ白だよ。ちがうものなんじゃないの」

「たぶん、八十年近くマブイを食べてないから色が抜けたんだろう。これからマブイを食べていけば、またネズミ色になっていくはずさ」

「マブイを食べるって、また戦争が起きるの」

「起きなければいいけどね」

「俺たちのせいか」

アキオが泣きそうに言う。

「あんたたちのせいじゃない。八十年近くもたったんだから、しょうがないさ」

おばぁの顔は暗かった。

「もう霊力のあるカミンチュがほとんどいないから、どうにもならんさ」

みんなこわくなって、おびえた顔をしていた。

ドーンなのか、ドカーンなのかわからないけど、夜中に、ものすごく大きな音がしてマンションの部屋がゆれた。本だなから本が落ちてきた。

「地震？」

ちょっとしたことでは起きない私が起きたのだから、大きな地震に違いない。

お母さんとお父さんも起きてきた。

バンバンと何かが破裂するような音がして窓ガラスが振動している。

お父さんが窓のカーテンをあけた。

天魔飛行場の方に真っ赤な固まりが見える。オレンジ色の光も見えた。

「火事かな」

お父さんがつぶやく。

消防車のサイレンの音がいくつも聞こえてきた。

「間違いない。天魔飛行場で火事だ。あれは、ヘリか何かが落ちたんじゃないか」

お母さんの顔が真っ青になる。

「爆発するの」

「ここは大丈夫だと思うが、飛行場近くの家は危ないかも知れない」

友だちの何人かは飛行場近くに住んでいる。大丈夫だろうか。私の体もふるえてきた。

「あっ」

お父さんが声をあげた。

赤い固まりのまわりに白いものが見える。天使だ。天使が火のまわりに集まってきている。

「天使が燃えちゃう」

心配になってじっと見ていると、赤い色は全然見えなくなった。天使たちが完全に囲んでしまったようだ。爆発する音も聞こえなくなった。

「天使たちが爆発をおさえているみたいだな」

お父さんがほっとした感じで言う。

ほんとに、天使が火事と爆発をおさえているんだろうか。あんな赤ん坊にしか見えない天使が。でも、たしかに火は見えなくなった。飛行場の灯りの中には、白い固まりしか見えない。消防車が集まってきているみたいだけど、どうなっているのかよくわからない。

救急車が白い固まりのまわりに何台か止まって、たんかのようなもので人を運んでいた。

翌朝、テレビのニュースが事故のことを伝えていた。

ヘリが一機、着陸に失敗して滑走路に墜落したと言う。その直後に天使が現れ燃えて爆発するヘリを囲み、火を消したらしい。どうやって消したのかはわからないらしいけど。そして、ヘリの中の乗組員を天使が救い出して、ヘリから離れたところに運んだのだと言う。

天魔飛行場は閉鎖になった。

そもそも天使が邪魔で使えなかったし、今回の事故で滑走路に大きな穴があいてしまったからだと言う。穴をふさいでも、天使がいる以上、飛行場は使えないままだし。

今回の事故も、天使がいる間は滑走路が使えないから、夜中に移動しようとして起きたのだと言う。

世界中の人たちが天魔飛行場の天使をテレビやネットなどで見ていて、天魔飛行場の危険性を知って非難していた。見た目が西洋の天使そのものだから、神さまを信じる人たちもアメリカ軍を非難していたし、アメリカ軍の中にも、自分たちを追い出すために神さまが天使をつかわしたと思っている人たちがいるらしい。

そこに今回の事故だから、世界中がアメリカ軍を非難したし、アメリカ軍もこれではやっていけないと思ったようだ。

天魔飛行場が閉鎖になって、天魔市民はみんな喜んだ。危険な飛行場だし、うるさいし、早く移転してほしいと思っていたのだから。

でも、閉鎖が決まってから、天使が降ってこなくなった。みんながっかりしたけど、仕方がないんだろうなとあきらめはついた。あの天使は飛行場を閉鎖する為に現れたんだと言う人が多かった。閉鎖になった以上、もう降ってくることはないだろうと。

トミおばぁがうがんじゅに行くと言うので、一緒について行く。

うがんじゅのうしろの穴は開いたままだった。

「戻ってきてはいないみたいだね」

私がそう言うと、おばぁもうなずいた。

「どこ行ったのかな。もしかして、新しく造る基地のところに行ったのかな」

おばぁは首を横にふる。

「それはないさぁね。あれはこの天魔市のマジムンだのに。あのマジムンがいるから、ここは昔から天魔って呼ばれているわけさ」

あ、そうなんだ。あまり気にしてなかったけど、たしかに魔物がいそうな名前だ。

「でもさ、おばぁ、あれはやっぱり天使だと思うよ。ヘリが落ちた時に乗組員を助けたって言うし。ヘリが爆発するのもおさえていたし」

「そうかもしれんね。いいマジムンかもしれない。最近思いだしたんだけど、戦争の時、あれらに襲われそうになったことがあるさ」

「襲われた？」

「今思うと、襲われたんじゃなくて、守ってもらったのかもしれん。うしろからあれなんかがわーっといっぱいかぶさるように飛んできたんだけど、そのうしろで爆弾の音がしたから。あれなんかがいなかったら、爆弾でやられていたかもしれないさぁ」

「そうだよ。おばぁ、天使に助けられたんだよ」

私は嬉しくなった。おばぁもちょっとほほえむ。

「カミンチュたちも、あれを休ませるためにここにいれて、人間が邪魔しないように封印したのかもしれないさ」

おばぁは腰をのばして空を見上げる。昔のことを思いだしているようだ。

「もしも、あれらがいいマジムンだったら、マブイを食べてネズミ色になっていたんじゃなくて、マブイの汚れを吸い取っていたのかもしれんね」

「汚れって？」

「恐いとか憎いとか悲しいとか腹が立つとか、そういう人間にとって良くない思いさ。戦争の時はそういうので汚れてしまったマブイばっかりだったからね。マジムンのことを、母親にもっとちゃんと聞いとけば良かったよ」

「聞かなかったの」

「戦争が終わった後は生きるのにみんな必死だったし、それにあまり戦争の話はしたくなかったのさ」

こんなに悲しそうなおばぁの顔は初めて見た。

「天使がほんとにいいマジムンで、もっといっぱい増えて、天魔市だけでなく、他にも基地があるところや戦争が起きてるところに現れたら、世界中が平和になるんじゃないかな」

私はそういう世界を想像してみた。とってもすばらしい世界に思える。

「おばぁもちょっと勉強してみるさ。まだ残っているカミンチュたちに会って聞いてくるよ。あのマジムンはいったい何なのか。どこから来てどこに行くのか。本当に人間の役にたつマジムンなのかさ」

「おばぁが勉強するの？　じゃあ、私も一緒に勉強する。もっと天使のことが知りたい」

おばぁは笑いながら私の頭をなでた。

天魔飛行場の方を見ると、天使雲どころか雲ひとつなく、青い空が広がっていた。

ユーミンの曲から着想

このたびは、授賞ありがとうございました。20年ぶりの応募で正賞をいただき、大きな励みとなります。

当作品の着想の元は松任谷由実さんの「ベルベット・イースター」です。曲を聴いてまず天使雲、そして天使が群舞するイメージが浮かびました。天使から「天魔」という言葉が派生し普天間へとつながりました。

当初、天使はランダムに降り、テレビで毎朝「天使予報士」が「降天使確率」を告げます。さらに、天使が「天魔飛行場」だけでなくその周辺にも降りそそぎ街中が混乱します。

受賞者の言葉

子どもたちが天使を一体ずつしょって登校するシーン、業者が天使を東京などに密輸して「天使カフェ」を開くシーンなど、ドタバタ劇が脳裏に渦巻きました。

枚数制約等のため、そういったシーンを盛ることができなかったのは、ちょっと残念です。

読者の方々にも、さまざまなバリエーションを空想し楽しんでいただけたらと思います。

無断複製・転載を禁じます